

氏名(本籍)	吉江雅子(茨城県)				
学位の種類	文学博士				
学位記番号	博甲第704号				
学位授与年月日	平成2年3月23日				
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当				
審査研究科	哲学・思想研究科				
学位論文題目	宋学の日本的展開の諸相				
主査	筑波大学教授	文学博士	高橋	進	
副査	筑波大学教授		広神	清	
副査	筑波大学教授		奈良博	順	
副査	筑波大学教授	文学博士	野口	鐵郎	

論文の要旨

本論文は、山崎闇斎に始まる崎門学派の諸思想を中心に、近世日本における宋学の受容・展開とその特質を、宋学それ自体との比較論的な考察を通して解明することを目的としている。具体的には、この目的を達成するため、著者はまず、宋学における理気論を中心とする世界観及び道德論の基盤としての形而上学的思惟の形式・方法・構造等を直接に分析解明し、次いで日本儒学者によってそれがどのように理解され変容されたかを、比較論的に考察し、近世日本における宋学の展開の諸相とその特質を明らかにしようとする。またその際、近世日本儒学のうち、特に朱子学を含む宋学を実践倫理として受容し、且つその規模の大きさと長期に亘る歴史的継続性をもって知られる、山崎闇斎・佐藤直方・浅見綱斎等の崎門学派諸思想を取り上げることによって、宋学の日本的展開の諸相を最も特徴的に捉えようとする。

論文全体の構成は、序論に続いて、第一編を3章に、第二編を4章に、第三編を3章に分けて論述し、これに結論を附しており、400字詰め原稿用紙にして約840枚に及ぶ。

序論は4節から成り、第一節では本研究の目的・方法及び宋学における形而上学的思惟とその特質を予め要約して論述し、第二節で研究対象設定の理由を述べ、第三節では朱子の理気二元論に基づく形而上学的思惟の考察に当たって、特に『朱子語類』の関連諸巻を精察するという研究方法を取ったこと、及び崎門学派の理気論の考察については、主として朱子の理気二元論との比較論的考察という方法をとったこと等を中心に、具体的研究方法を述べる。第四節は崎門学派諸思想の研究にかかる中心資料としての「講義録」や「筆記」等の解題を行い、従来の研究はこれらの資料を用いていないことを明らかにする。

第一編「宋学における形而上学的思惟の展開」は、序章と3章から成る。序章では、宋学におけ

る形而上学的思惟を論ずるに当たり、その基本概念としての「物」「物の理」「存在の原理」等を取り上げて考察し、その際『周易』『老子・王弼注』『列子』等の古典資料をも用いて、これら諸概念を整理している。第一章「北宋における形而上学的思惟の展開」は3節から成り、第一節では宋学の基本的思惟方法に関わる『周易』繫辭伝の「一陰一陽之謂道」「易有太極，是生兩儀」を取り上げて、いわゆる「易的論理」を解明し、第二節では張横渠における気の思想が、「易有太極，是生兩儀」を基礎において構成されていることを論じ、第三節ではまず周廉溪の『太極図説』を取り上げ、いわゆる「易的論理」が『太極図説』に理論的に組み込まれていることを論証する。さらに「無極而太極」の解釈から、形而上下を繋ぐ論理として、①「太極」は、個物がそこから生起するという点では物としての性質を有しながら、経験的認識の対象とならない「もとのもの」＝「有一般」として設定されていること、②「無極」は、「太極」がそれに於いて在る場所の如き意味を有すること、③「太極」は、純粋な形而上の原理としての「無極」の形而下的全体として規定されること、等々を先行研究に導かれながら詳細に解明している。

第二章「朱子における形而上学的思惟の集大成」は3節から成り、第一節では朱子の気の思想について、特に陰陽の概念を、(a)「一陰一陽之謂道」と(b)「易有太極，是生兩儀」の二つの視点から、張横渠・程伊川思想との比較論的考察を含めて論述する。そして、(a)の「道」は、朱子の「所以然之故」に通ずる理とみられること、(b)の朱子の解釈は、張横渠の気の思想を継承しており、「太極」は物の性格を持つ生成論的一氣に相当すること、したがって、朱子の理気二元論では、「太極」は理と見做されるが、上の(a)(b)に関する朱子の思想を合わせて考察すると、理気二元論に矛盾が生ずること、等々を詳細に論ずる。第二節では朱子の理の思想の特質を、「所以然之故」と「所当然之則」、理一分殊の論理、理気先後論と理の能動性、物の理と事の理、等々に関して精察する。第三節では「無極而太極」の朱子解釈で得られた形而上下を繋ぐ論理が、理と氣とを一体化させる論理に適用され得ること、「無極」を場所的な「無」と捉える考え方が朱子にも継承されていること、等を解明している。

第二編「形而上学的思惟の日本的展開の諸相」は4章から成る。第一章「山崎闇斎における世界観」は3節から成り、第一節では闇斎の宋学受容・解釈と垂加神道の理論的深化は同時進行であったことを、その思想形成過程から論証し、併せて闇斎研究の動向と問題点を挙げる。第二節では『文会筆録』を中心資料にして、闇斎の理気論を考察し、彼の理は、存在する物が自ずからかく在るその在りかたであり、同時に能動性・主宰性を有することを解明する。また闇斎においては、宋学的な「無」や、理と氣を繋ぐ論理が認められず、彼の理気論は、理気一体論的構造を示すことを明らかにする。第三節は闇斎の垂加神道における生成論は、「始生」の論理等宋学の気の思想を取り入れ、伝統的神道思想に論理的整合性を与えた思想であること、また「易的論理」との比較論的考察により、垂加神道の世界観は、位・名・価値等が定まって不変であることを基調にしていることを詳細に論証する。

第二章「佐藤直方の世界観」は3節から成り、第一節では直方の破門事件を例にとって、崎門学派の特質を論ずる。第二節・三節では直方の理気論は、普遍的・絶対的で且つ主宰性を有する理の

存在が前提されていること、理を現実に機能せしめるためにこれを主体内在化したこと、宋学的な「無」が想定されないことによって、理気一体論的な思想構造となっていること、等を解明する。第三章「浅見 斎における世界観」は3節から成り、第一節はその経歴と 斎研究の動向と問題点を挙げ、第二節では「ナリ」「筋目」等の邦語の思想的意味と用法から理気論の構造を解明するという独自の研究方法により、 斎の理気論が、閻斎の神道論にみられた理気論を継承した理気一体論であることを論証し、彼の理が情義的とされる根拠を理気論の構造から初めて解明した。第三節は「天地自然の理」の解釈から、 斎の世界観と古学派の世界観との共通性を指摘する。第四章は上述したことをまとめ、特に「己むをえざる」という語に託される日本の自然観、全体と全体における個との関係等について宋学の日本的展開の特性を論じている。

第三編「朱子の道德論とその日本的展開」は2章から成る。第一章「朱子における道德論」の第一節では、理気二元の論理が性・心論にどのように適用されているかを論じ、第二節では「窮理」「居敬」の実践修養論を解釈し、世界存在の原理と道徳的实践原理とを一致させる論理を解明し、「居敬」「窮理」によってこそ道徳的主体が確立されることを論ずる。第二章「道德論の日本的展開の諸相」は4節から成り、第一節では近世日本における道德論の特性を、『大学』の八条目の解釈を中心に論ずる。第二節では山崎閻斎の『大学』解釈と敬の思想を、第三節は佐藤直方の敬の思想を、第四節は浅見綱斎の誠の思想を、彼らの世界観と関連させて解明する。三者の道德論の特徴として、①道徳的主体は道徳的規範（綱常）の実践によって確立されるとし、朱子の道德論が、道徳的主体の確立を俟って後に実践があるとしたことと極めて対照的であり、朱子の道德論の目的とするところが、彼らの道德論の出発点であったこと、②三者とも、実践における心情の純粋さに人間の道徳性の価値を認めていたこと、等を指摘している。

結論は、以上の論述をまとめて、本論文の主旨と成果を明らかにしている。

審 査 の 要 旨

従来の日本思想史研究において、近世日本儒学が中国宋代の学問・思想を受容し、これを実践論的方向に展開したことは既に指摘されている。しかし、個々の研究者自身によって、いわゆる宋学それ自体、特に世界観ないし道德論の基盤をなす形而上学的思惟の内容が十分に検討なされなかったため、実践論的儒学と宋学との相違を部分的に指摘することはあっても、実践重視の儒学を構成する理気論の構造や、その根柢にある実践重視の儒学を生み出した思考のしかたにまで論及するに至らなかった、というのが著者の持つ見解である。そこで著者は、この反省に基づき、宋学における形而上学的思惟の構造及び道德論を、「易的論理」等その基盤となった諸思想をも視野に入れて詳細に考察究明し、次いでこの形而上学的思惟の構造及び道德論に関わる特徴的な思考のしかたが、日本の儒学においてどのように受容・理解され、また変容されたかを、両者の比較論的考察によって究明し、近世日本における宋学の展開の諸相とその特質を明らかにした。著者のかかる研究上の目的・方法それ自体が従来みられない独自のものとして評価できるとともに、これによって著者は

いくつかの新しい知見を提示し得た。

例えば、北宋の周廉溪・張横渠・程伊川等の形而上学的思惟を「易的論理」との関係において精密に考察し、両者の理論的関連を明確に整理したこと、「無極而太極」における「無極」「太極」両概念が形而上下を繋ぐ論理として厳密に解釈され、理論的整合性を提示し得ていること、朱子の理気二元論の論理的矛盾を、周廉溪・張横渠・程伊川の思想と関連させながら、陰陽概念から指摘したこと、等は宋学に真正面から取り組んだ成果といえる。また日本儒学に関しては、山崎闇斎の宋学受容・理解と垂加神道の理論的深化とは同時進行的なるを論証したこと、闇斎の理気論が理気一体論的な構造になることを提示し得たこと、垂加神道の生成論が「始生」論等宋学の気思想を取り入れ、従来の神道論に論理的整合性を与えた思想であること、またその世界観が位・名・価値等が定まり不変であることを基調にしていること等を論証したこと、佐藤直方及び浅見綱斎の理気論における特性を夫々解明し、結果として闇斎の理気一体論的構造と同じ方向を取るとしたこと、闇斎・直方・綱斎三者に共通する道德思想の特徴を彼らの世界観との関連及び宋学との比較によって導き出したこと等々、その論述は説得力を持ち、見るべきものがある。

然しながら反面において、宋代思想の特性ともいえる「無極」「太極」論の思想史的背景への関心、二次的理気論から一体観的理気論へ変容した日本の思想的土壌ないし背景への関心、特に闇斎の垂加神道論に先行する林羅山の「理当地神道」思想への関心等が欠けていること、宋学と日本儒学の間面に生起した李退溪等の朝鮮儒学思想に論及し得なかったこと、道德論の日本的展開の諸相に関する考察がやや手薄であること、論述の体裁、整合的表現に難点のある箇所が見えること、等々は今後の著者の研究と留意に俟つところである。

以上、本論文は多少の不備もあるが、全体としてみれば、著者の独自の研究方法と、難解な思想をできるだけ平易な自己の言葉によって究明することに努め、新しい知見を提示し得た営為・努力の成果とは、学界に貢献するところが少なくないものと認められる。

よって、著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。